



教皇様の聲

2

226号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1999

御父の家への巡礼

「父である神」シリーズ 1

1 「私は父から出て世に来たが、今や世を去って父のもとに行く。」(ヨハネ16・28)

イエズスのこの言葉を冒頭において、今日から新しいカテケージスのお話を始めたいと思います。テーマは「父である神のお姿」です。紀元二千年の大聖年を迎える準備の一環として、回勅『紀元二千年の到来』が提示するテーマに沿って進めて行くつもりです。

準備の最初の年には、唯一の救い主イエズス・キリストについて考えました。人類の歴史に神の御子が入られたことを祝う聖年は、確かにキリスト論的な色彩を強く持っています。私たちは時の意味について黙想し、二千年前の救い主の誕生に中心点を見出しました。救い主の誕生は、キリスト教時代の始まりを告げると同時に、キリストの最後の来臨を待ち望みつつ人類と世界を刷新する新たな段階の幕を開けたのです。

大聖年を祝う準備の第二年目のカテケージスでは、イエズスによって御父から送られた聖霊に注目し、創造のみわざと歴史における聖霊、愛であるペルソナ、賜物であるペルソナについて考え、混沌の中から秩序と美に富んだ宇宙を引き出した聖霊の力を強調しました。神の生命が聖霊によって伝わり、歴史は聖霊とともに救いの道となったのです。

イエズスの全てが父である神を示す

大聖年を間近にして、準備の三年目である今年は御父の家に向かう巡礼の年として過ごしたいと思います。キリストにおいて啓示された愛の計画に従い、御父から出発して全被造物を御父のもとに連れ帰る旅に出かけましょう。大聖年への旅は、御父において三位一体が栄光をお受けになるよう、御父への高貴な賛美の行為(『紀元二千年の到来』49番参照)とされなければなりません。

2 考察を始めるに当たり、出発点となるのはイエズスを御父の御子であり、啓示者として示す福音書の言葉です。イエズスの教えも使命も生き方も、全てが御父を表わしています。(ヨハネ5・19と36、8・28、14・10、17・6参照) 御父はイエズスの生涯

の中心であり、イエズスは私たちが御父に近づくための唯一の道なのです。「私によらずにはだれ一人父のみもとには行けない。」(ヨハネ14・6) イエズスこそは人間が御父と出会える場であり、イエズスの中に御父を見ることができます。「私を見た人は父を見た。それなのに、どうして『父をお見せください』と言うのか。私が父におり、父が私にましますことをあなたは信じないのか。」(ヨハネ14・9～10)

御父とイエズスの関係を最も印象深く示すのが、イエズスの使命の頂点であり信じる者にとって新しい永遠の生命の基である復活後のイエズスの状況ですが、御父と御子の結びつきが、御子と信じる人々との結びつき同様、イエズスが「上げられる」という秘義を通して実現したことは、ヨハネ福音書が独特の語り口で伝えている通りです。「上げられる」という言葉を使って、ヨハネはキリストの十字架上の死と栄光の両方を表わしました。信じる者たちに両方が示されたのです。「人の子も上げられねばならぬ。それは、信じる全ての人が彼によって永遠の命を得るためである。神は御独り子を与えたもうほどこの世を愛された。それは、彼を信じる人々がみな滅びることなく永遠の命を受けるためである。」(ヨハネ3・14～16) 「永遠の命」とは、信じる者が復活のイエズスの命にあずかることであり、一つである(ヨハネ10・30、17・21～22参照) 御父と御子をつなぐ愛の働きにあずかることなのです。

3 御父と御子と信じる者が深く交わる時、そこには聖霊もおられます。聖霊は、御父と御子をつなぎ、人間をこの計り知れない愛の秘義に招き入れる永遠の絆だからです。「慰め主」として与えられた聖霊はキリストの弟子たちの内に住み(ヨハネ14・16～17参照)、三位一体の神を現存させます。

ヨハネ福音書によると、イエズスは弁護者を送ると約束したまさにその時、弟子たちに言われました。「その日には私が父におり、あなたたちが私におり、私があなたたちにいることを知るだろう。」(ヨハネ14・20)

私たちを三位一体の命の秘義に招き入れるのは、聖霊です。「真理の霊」(ヨハネ15・26、16・13) は信じる

者の心の奥底で働き、真理であるキリストの輝きで精神を照らします。

4 聖パウロも、私たちの内に住まわれるキリストの霊を通して御父に向かうことを強調します。使徒によれば、これは私たちがイエズスのお使いになったのと同じ親しみを込めた呼び方で、神である御父を「アッパ」(ローマ8・15参照)と呼びかけることを可能にする、まことの父子関係なのです。

聖霊の力に支えられて、御父へと向かう

全被造物がこのような新しい次元で神との関係にあずかり、「切なるあこがれをもって神の子らの現われを待っています。」(ローマ8・19)そして、キリストのうちに宇宙の調和を建て直し、完成させる完全な贖いを待ち望んで「今まで嘆きつつ陣痛の苦しみに会っています。」(ローマ8・22)

人間と全ての被造物を御父に結びつけるこの秘義に

ついて述べつつ、使徒はキリストの役割と聖霊の働きを描いています。万物が造られたのは、「目に見えぬ神の姿」(コロサイ1・15)キリストを通してでした。

キリストは「始まりであり、死者の中から最初に生まれた御方」(コロサイ1・18)です。キリストにおいて「天にあるもの地にあるものすべては集められ」(エフェソ1・10参照)ます。それらを御父に渡すのはキリストの役目です。(Iコリント15・24参照)

こうして神が、「全てにおいて全て」(Iコリント15・28)となられます。御父に向かう人類と世界の旅は、聖霊の力に支えられています。聖霊は私たちの弱さを助け、「筆舌に尽くしがたいうめきをもって、私たちのために取り次いでくださいます。」(ローマ8・26)

このように新約聖書は、御父から出て御父に戻る動きを私たちに明白に伝えています。大聖年を迎える最後の準備の年に当たり、特別の注意を払ってこのことについて考えてみましょう。(98・12・16)

マリアとヨゼフの結婚

聖母シリーズ 21

1 ルカの福音はマリアを「処女」であると述べる一方で、「ダビド家のヨゼフといいなずけだった」(1・27)とも記しています。この二つの情報は、一見矛盾しているように思えます。

気をつけなければならないのは、この文章に使われたギリシャ語は、婚姻契約を交わしたのち結婚生活を送っている女性の状況を表わしているのではなく、婚約した状態を示しているということです。現代の習慣とは異なって昔のユダヤでは婚約は契約と同様であり、決定力を持つのが普通でした。若い男女が同居するまでは結婚が成立しないにしても、婚約は結婚につながるものでした。

お告げの時、マリアは婚約していました。マリアはずっと処女のままでいるつもりだったのに、どうして婚約を承知したのでしょうか。ルカはこの難問に気づいていましたが、説明抜きで状況だけを伝えました。マリアが処女を守るつもりであったことを強調し、同時にヨゼフと婚約していたことを示したのは、この二つが歴史的に見て信憑性のあるしるしです。

ヨゼフ、救いの計画に呼ばれる

2 婚約した時、ヨゼフとマリアの間に、いわゆる夫婦行為を伴わない生活を送るという計画について、了解があったと考えることができます。しかも聖霊は、托身の秘義においてマリアに処女性を選ばただけでなく、ヨゼフに御子を育てる家庭を築くことを望み、彼にも処女性の理想を注ぎ込まれました。

天使が夢に現われて、ヨゼフに告げました。「ダビド

の子ヨゼフよ、ためらわずにマリアを妻として迎えよ。マリアは聖霊によって身ごもっている。」(マテオ1・20) こうしてヨゼフは、結婚に召されていることを全く特別な方法で確信しました。イエズスを誕生させるために選ばれた女性との夫婦行為のない交わりを通して、神はヨゼフを救いの計画の実現に協力するよう招かれたのです。

聖霊に導かれたマリアとヨゼフの結婚生活は、救いの計画と、高い霊性という面からのみ理解することができます。托身の秘義が現実のものとなるには、神の子であることを示す、処女からの誕生が必要でしたし、御子の人間性の発展のためには家庭がなければなりません。

みことばの托身の秘義への貢献という点から見て、ヨゼフとマリアはそれぞれ童貞性と処女性の恵みと共に結婚の賜物をも受けていました。夫婦行為を含めぬ愛で結ばれたマリアとヨゼフの生活は、托身の秘義を実現させるための特殊な事例ではありますが、真の結婚です。(使徒的勧告 *Redemptoris custos* 7番参照)

マリアとヨゼフの結婚という崇高な秘義を理解するのは難しいことだったので、2世紀以来、ヨゼフをかなり年上と考え、マリアの夫と言うよりは保護者だったとする人もいました。しかしヨゼフは当時それほどの年ではなく、むしろ内面の完成度と恩寵の実りが、処女マリアとの睦まじい結婚生活を可能にしたと考えられることができるでしょう。

レオ13世、全教会をヨゼフに委ねる

3 托身の秘義への協力は、ヨゼフがイエズスの父としての役割を果たすことをも意味しました。このことを心得ていた天使は、夢に現われて御子に名をつけるよう告げました。「彼女は子を生むから、その子をイエズスと名付けよ。なぜなら彼は罪から民を救う方だからである。」(マテオ1・21)

肉体的なことを別にすれば、ヨゼフの父性は見せかけではなく本物です。マリアの処女性について論じた4世紀の古い文書(De Margarita)は、父親と、誕生させた者とを区別して述べています。「夫と妻としてヨゼフとマリアが引き受けた仕事は、ヨゼフがこの名(父)と呼ばれることを可能にした。誕生させていない父親

ではあったが。」このようにヨゼフはイエズスの父としての役目を果たしました。贖い主も自由に「従われた」(ルカ2・51) 権威を行使し、大工の仕事を教え、育て上げることに貢献したのです。

キリスト信者は、つねにヨゼフをマリアやイエズスとの親密な交わりのうちに生きた人として認め、死ぬ時も二人の愛情と慰めに包まれていたと結論しました。こうしたキリスト教の変わらぬ聖伝によって、多くの場所で聖家族への特別な信心が始まり、中でも贖い主の守護者である聖ヨゼフが崇敬されるようになりました。皆さんもご存じのように、教皇レオ13世は全教会を聖ヨゼフの保護にゆだねました。(96・8・21)

祈りを通して決断する

(…)仕事始まりとともに普段の活動が始まります。会社も学校もいつものペースを取り戻します。多くの人にとって、今が「計画を立てる」時、問題に立ち向かい、目標を明らかにし、解決のための手段や方策を決定する時です。

私は皆さんに信仰の基本となる原則を思い出していただきたいと思います。私たちのもくろみを超えたところに、私たちを取り巻き、導く愛の秘義があります。それは神の愛の秘義です。人生に良き方向づけを望むなら、神が日常生活の中に置かれた不可解な「交通標識」を読み取り、神のご計画を見抜くことを学ばねばなりません。それには星占いも未来の予言も役に立ちません。必要なのは祈り、真の祈りです。神の法にそって人生の決定を下す時、つねに伴っているべき祈りです。

(…)「弁護士」であり「知恵」の霊である聖霊に頼みましょう。聖霊以上に未来をよく知り、正しい方向に踏み出せるよう私たちを導くことができる方はありません。ちゃんとした計画を立てるには、判断の尺度が必要です。実際の状況で必要になる尺度もあります。それらは必要や機会や効果性の規準です。しかし、全

てを物質的な問題に還元しないよう気をつけなければなりません。技術や事務手続きで事足りれりとしてはなりません。本当に「人間的な」計画を立てたいと望むなら、その企てには道徳や靈性に関する価値が含まれていなければなりません。私たちは傍らにいる人々、特に私たちに頼る人々や、多少を問わず私たちの決定によって影響を受ける人々を、単なる数や物としてではなく常に人格を持つ人間とみなし、見つめる努力をしなければならぬのです。

一言で言えば、こうです。個人として、また共同体としての自らの生活を、利己主義ではなく愛によって動くものとする。兄弟姉妹、特に子供や病人、老人、失業者などを念頭に置いているのですが、多くの点で、あるいはあらゆる面で他者に頼らざるを得ない人々に心を開いてください。そうすれば私たちの計画は連帯の行為ともなるでしょう。

祝された処女に、まことの「心の知恵」を願いましょう。人生をりっぱに計画し、新たな熱意で働くことができますように。「良き勧めを賜う御母」が私たちに良い考えを与え、神のご計画に沿った生活プランを立てる手助けをしてくださいますように。(98・9・6)

みことばが人類家族の一員となった

親愛なる皆さん。(…)今日、私は福音書の中で一度ならずイエズスに捧げられた称号、「ダビドの子」という呼び名について少し考えてみたいと思います。マテオの福音は、まさにこの言葉で始まります。「…ダビドの子、イエズス・キリストの系図。」(マテオ1・1)

これは一族の肩書と言えるでしょう。養父ヨゼフを通じて、イエズスはダビド王にさかのぼる全人類の鎖の一環につながっているのです。こうした系図のつな

がりは、托身の現実性を浮き彫りにします。人となることで、永遠の神のみことばは人類家族の一員となり、ある特定の家系に加わったのです。このようにしてみことばは私たちの中の一人となることを望まれました。世代と世代をつなぐ絆、個々の人間が時と場所のみならず、追憶と愛情という織物に織り込まれていることを実感させる、そんなユニークな絆を経験されたのです。

しかしこうした人間的な意味合いに加えて、「ダビドの子」という称号は神の計画に光を当てる特別な意味をも帯びています。実際、それはキリストの生涯が救いの歴史の頂点であることを思い起こさせてくれます。旧約の時代から、神は救いを徐々に進めてこられました。ユダヤ民族に特別な「契約」を結び、ナザレトのイエズスが全人類のために成就するはずの救いの約束の担い手とされたのです。こうして同時代の人々がイエズスを「ダビドの子」と呼んだ時、人々は古い約束がイエズスのうちに成就したことを認め、救い主への希望がついに実現したことを宣言します。今や全ての人がこの希望に近づき、福音書に登場する盲目のバル

ティメオの叫びを自分の叫びとすることができるのです。「ダビドの子イエズス、私を憐れんでください！」(マルコ10・47)「ダビドの子」に願うことによって、人は自らの心を見つめる光を見出すことができます。

ナザレトの謙遜な処女マリア、神の子を誕生させ、御子をダビドの系図と全人類家族に導き入れた方。私たちがこの救いの歴史にどう関わっているのか理解することができるようお助けください。新しい人類の苗床となった聖家族に親しみ、聖母の導きに従いましょう。(…) 祝された処女が全世界の家族を祝福し、皆がイエズスをまことの救い主と認めることができますように。(97・1・5、お告げの祈りにて)

教皇さまの動き

●1・14 教皇庁文化委員会主催のシンポジウム「キリスト：新しいヨーロッパの文化の源—紀元二千年を前にして」の閉会に際し、教皇さまは参加者たちにお話しになった。「真理の探求に当たって、文化と信仰との出会いは今や必要不可欠です。」「真理を求める人は恩寵の助けによって創造主・救い主と出会います。キリストは、人としての尊厳と偉大な知性、真理に到達する可能性、自らの意志で良く行動する能力を備えた神の子としての人間本来の姿を、人間自身に示します。」「国家間の国境は開かれました。民族間に新たな障壁やイデオロギーに基づく新たな敵意が生まれてはなりません。真理の探求は、文化の進展と国々の友好関係のための原動力とならねばなりません。」「多くの難問を抱えた世界にあって、キリストのメッセージは限りない地平線を開き、比類ない力、知性を照らす光、強い意志、愛の心をもたらししてくれます。」

●1・15 朝、教皇さまは350名に及ぶバチカン図書館と古文書管理部のスタッフをお迎えになった。「歴代教皇は、文書部と図書館に二つの特質を認めてきました。一つは保存された文書類と聖座、特に教導職の任務遂行とのつながりです。これら貴重な文書類は教会の記憶そのものを保ち、伝えます。こうして何世紀にもわたる教会の使徒職が、その光と影もそのままに、一貫して伝えられているのです。」「二つ目は文化の福音化への寄与です。私たちは福音が教えているまことのヒューマニズムに由来する数々の価値を見つける努力をしなければなりません。」

●1・19 朝、聖アグネス(350年ごろ殉教)の祝日にちなみ、2匹の小羊を祝福される。毎年恒例の行事である。同日、教皇さまの今年の四旬節メッセージが公表された。「主は全ての民のために宴を催される。今年の四旬節メッセージの中心となるこの言葉は、全ての男女への天の御父の恵み深い摂理を考えさせます。」「人々が親しく交わる宴は、喜びのしるしです。多くの兄弟姉妹が、惨めさや不自由や病気の状況をいつかは天国での永遠の宴に呼ばれる時が来るという希望のもとに耐えています。」「四旬節は、この世の事柄が絶対だと考えてしまう誘惑を振り切り、天国が故郷であることを悟る好機です。」「御父の愛を味わったキリスト者は、他者のために身を捧げ、奉仕と連帯、兄弟姉妹に心を開くという精神に従います。…孤独な人、疎外された人、飢えた人、暴力の犠牲者、希望を失った人々は、ぜひとも天の御父の優しさを体験することができねばなりません。…特に日々の消費文明の宴から取り残された人々にとっては。」「個人ばかりではありません。国際機関や政府、世界経済をあやつる人々は全て、地球上の富がもっと公正に分配されるよう、思い切った計画を進めるべきです。」

訂正

「教皇様の声」1月号第2ページの15行目に脱落箇所がありました。「…無駄な探求が続いていると言えません。」は、「…無駄な探求が続いているとしか言えません。」の誤りです。お詫びして、訂正します。

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円(税込)

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448

振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会